

オリンピック・パラリンピック特別研究助成制度 成果報告会

ダイバーシティ実現に向けた 幼児期からの教育プログラムの開発

— 障害者スポーツを活用した障がい理解教育の幼児向け実践プログラム開発と展開 —

ライフデザイン学部

生活支援学科子ども支援学専攻

南野奈津子

- 障がいの理解は小学校に入る年齢から始まるのか？
- 「色々な人を受け入れようね」と言えば理解するのか？
- どのような学びで行動は変わるか？



- ・ 幼児期体験は人間形成に影響を与える
- ・ 幼児教育は多様性理解重視へ
- ・ 幼児期から積極的に障害者スポーツに触れる意義

- ・ ロンドンのパラリンピック
- ・ 観客の75%は親子連れ
- ・ 教育がパラリンピック大会の成功に貢献

- ・ 幼児対象の障がい理解教育の実践、関連教材が少ない

幼児期での
多様性理解の
意義

オリンピック・
パラリンピック
理念共有に教育
が有効

手法は不足

障害者スポーツを
取り入れた
障がい理解教育
ツールの開発

Step1
実態を知る

2018

保育所・幼稚園・
認定こども園
2000カ所への
アンケート調査

Step2
つくる

2019

障がい理解教育
プログラム教材開発

- 絵本
- 動画DVD
- 指導案

Step3
実施&改良

2020・2021

実践と評価

- 保育所・幼稚園・
認定こども園への
配布・実践と
効果検証

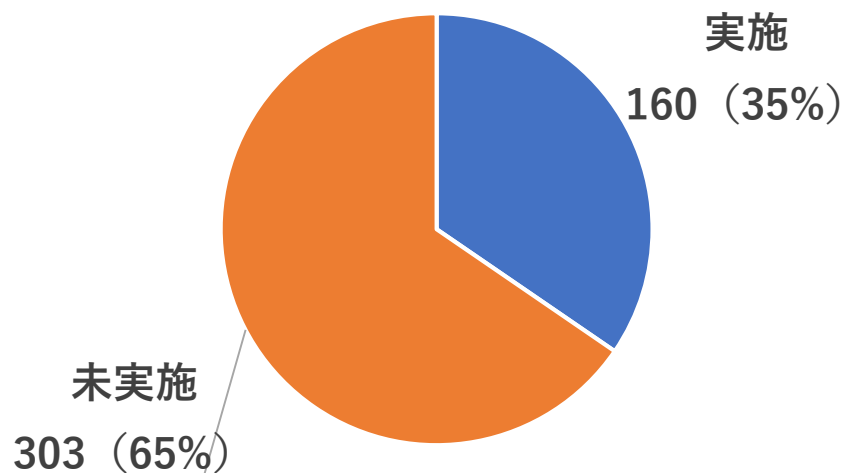
Step1 実態を知る

- 障がい理解教育を未実施の機関が65%
- 「絵本の読み聞かせを4、5歳児に対し年に数回」が多い
- 障がい理解教育は子ども全般、保育者自身、保護者それぞれで良い効果をもたらしている
- 方法やスキル、人材、必要性認識等が実施を難しくする
- 実施者にとっては絵本、DVD、指導案があるとよい

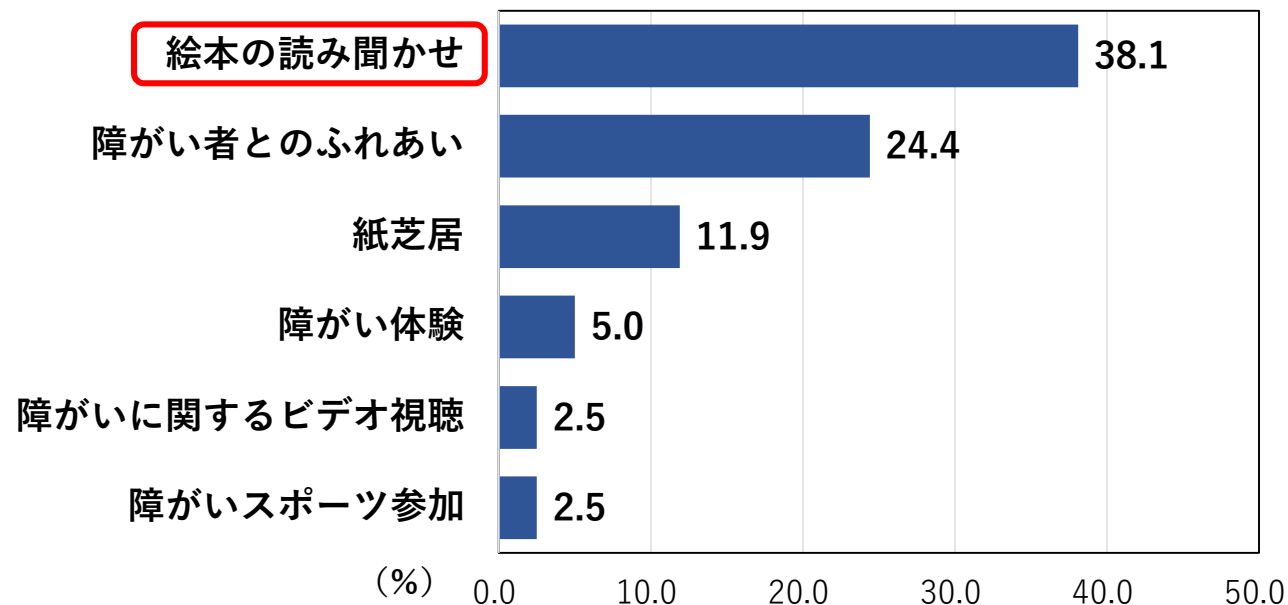
Step1
実態を知る

首都圏の施設2000カ所への送付、有効回答465 (23.3%)

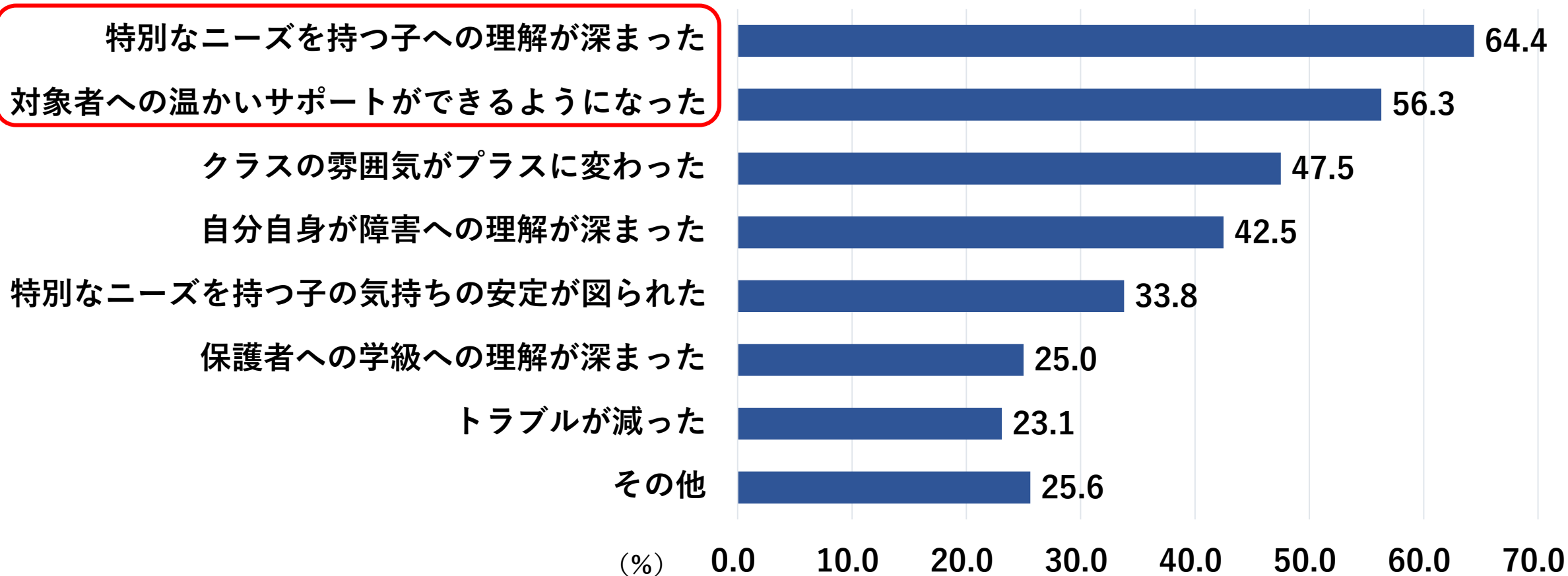
【障がい理解教育を実施しているか】



【 内 容 】



【障がい理解教育の実施効果】



【実施上の課題】

保育者のスキル不足

障がいがある児童の保護者へのサポート

障がい理解の気づき

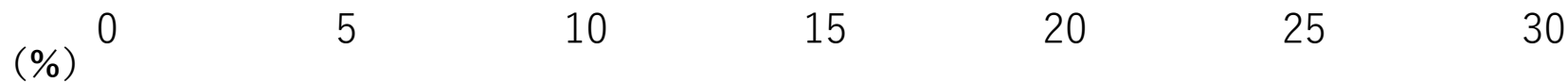
健常児の保護者への理解を求めること

健常児への伝え方

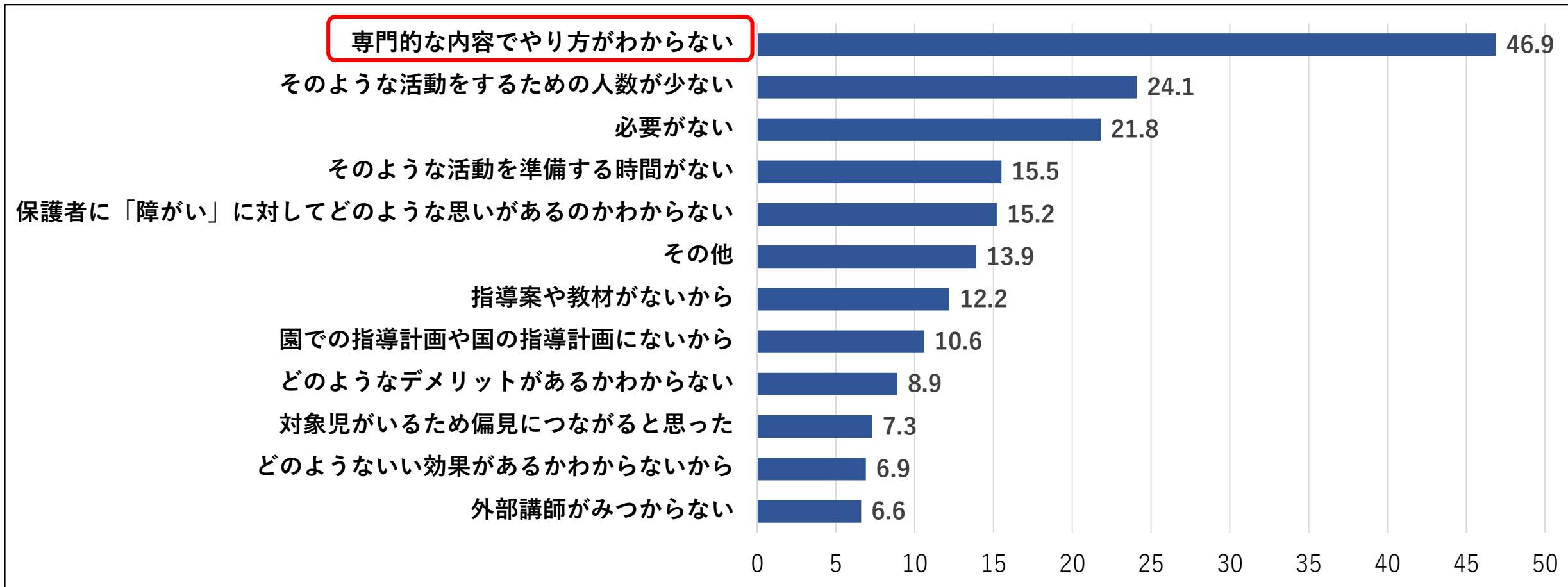
経営上の困難さ

教職員の連携の困難さ

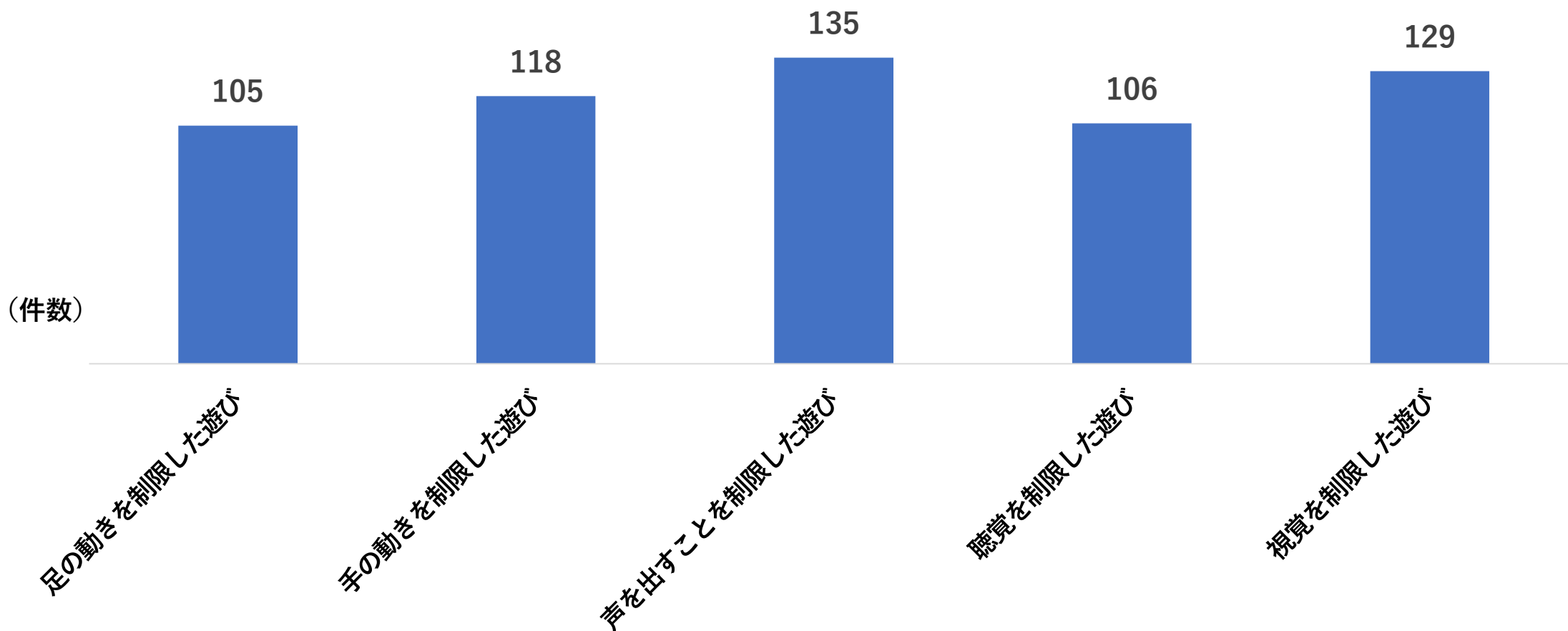
その他



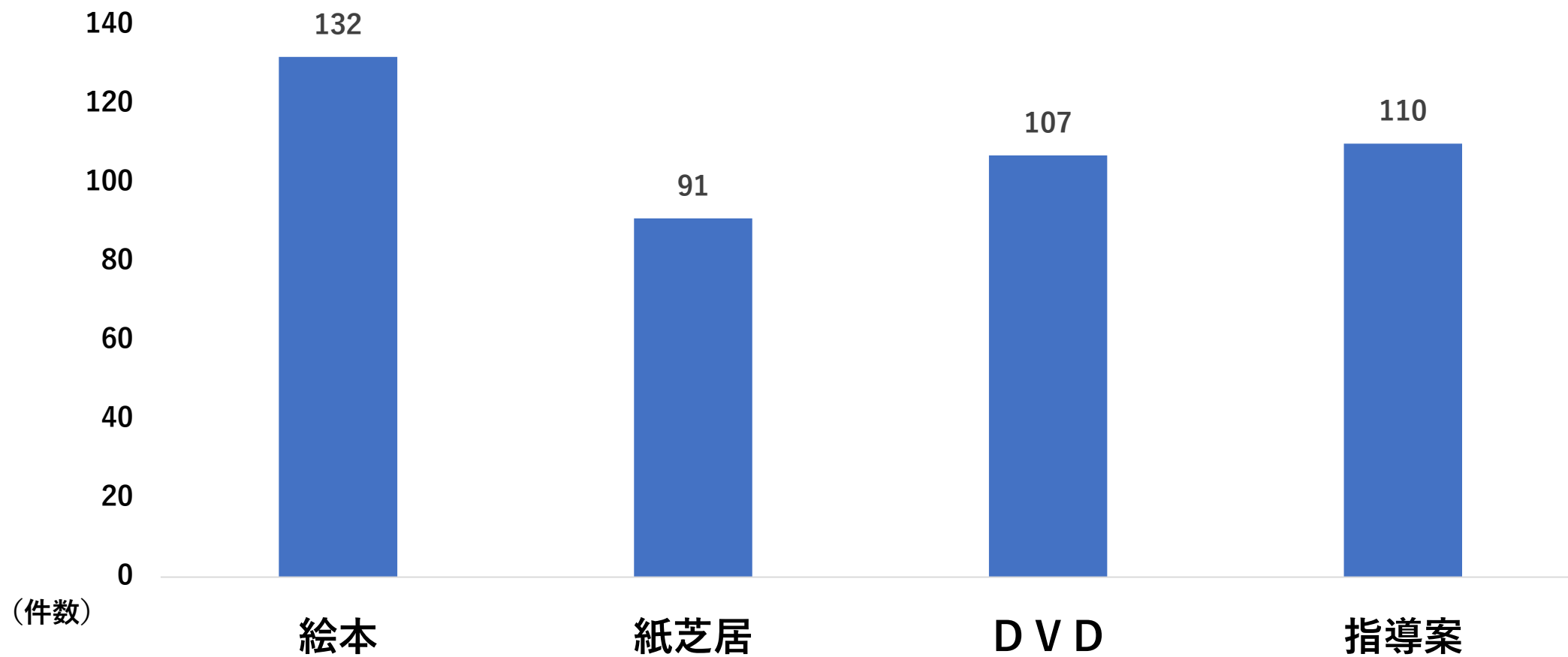
【障がい理解教育を実施していない理由】



【障がい理解教育に関してあったらよいと思う遊び】



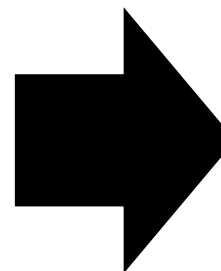
【障がい理解教育に関してあったらよいと思うツール】



Step2
つくる

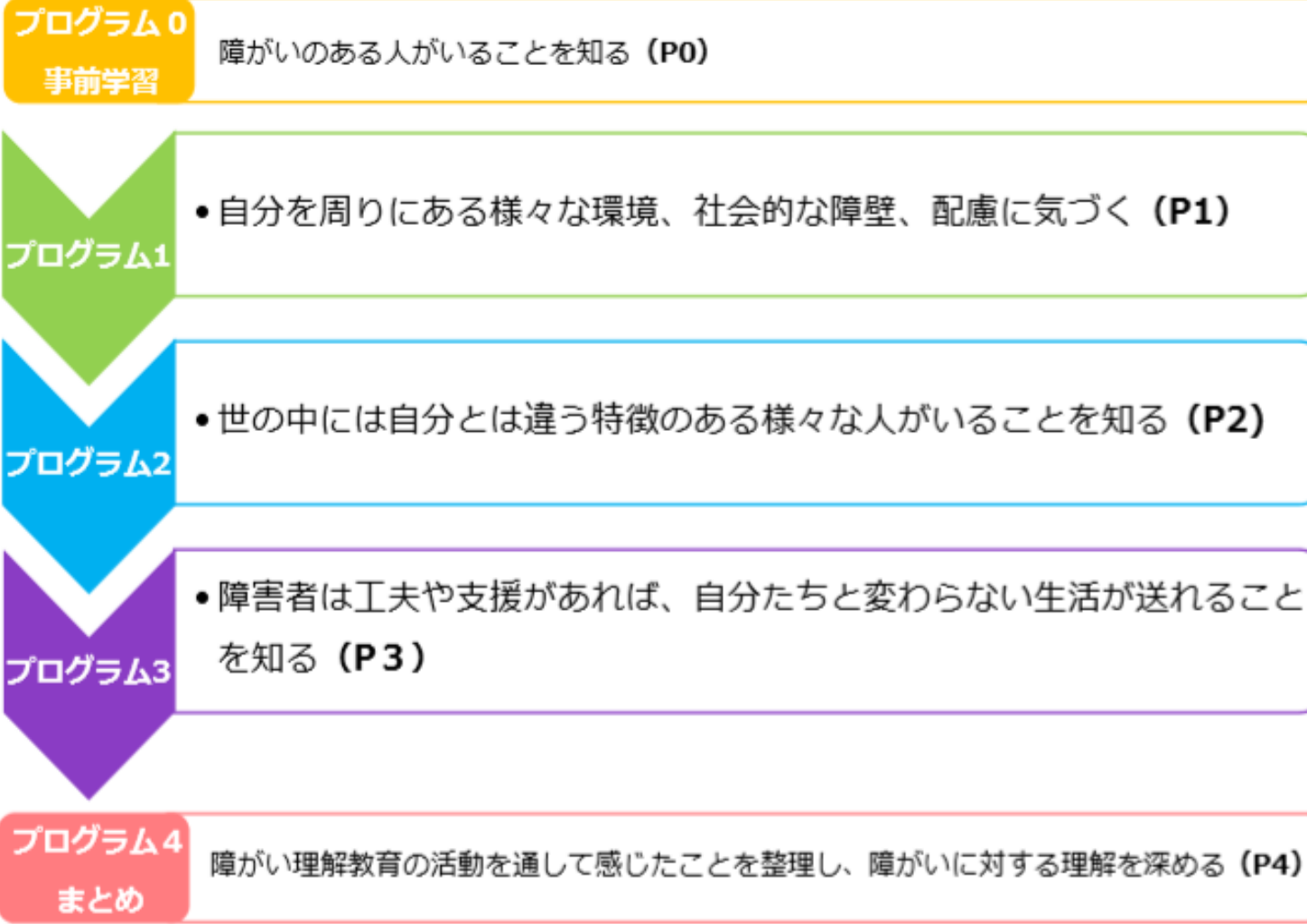
障がい理解教育プログラムの開発

- 取り組みやすい: 専門知識がなくてもできる
- 取り入れやすい: 身近なもの、今の場所でできる
- 楽しい: 遊びや運動の要素
- 気づき: 体を動かし、気づき、感じる
- みんなで: 障害者スポーツ選手、学生との協働



パッケージ化された
「指導案・DVD・絵本」の
開発

【指導案】 学びの道筋に基づいた5つのプログラム、4つの指導案



第2回 目かくしボール遊び 「いろんな人がいて、みんなが心地よく仲良く暮らすためには①」			
対象クラス	5歳児 (20名程度)	実施場所	教室および体育館などの ある程度広いスペースの確保できる室内ホール
活動目標・ねらい			
1. 世の中には、自分とは違う特徴のある様々な人がいることを知る。 2. 障がいを抱えていても、優れた能力があることを感じる。 3. 映像視聴や目隠しボール遊びを通して、視覚障がい者の気持ちを感じ、困っている人に対して自分ができることをイメージする。 4. 障がいを抱えていても、工夫や支援があれば、健常者と変わらない生活を送ることができることを知る。			
実践時間の目安の時間			
第2回 目かくしボール遊び			
・導入	5分	・映像視聴と話し合い	15分
・コロコロ・キャッチボール	10分	・コロコロ・ボーリング	10分
・振り返り	5分	計	45分
留意点			
・「楽しむこと」に加えて、子どもに考えさせたい「ねらい」を意識して行う。 ・第1回の学びに関連付けて、導入映像教材を視聴する。 ・「なぜその「なにが」いけなかったか?」「どうしてトントんしているのか?」の箇所映像を止めて、その「なにが」いけなかったか?」「どうしてトントんしているのか?」の箇所映像を止めて、その「なにが」いけなかったか?」や社会的な障壁に対する理解が深まるよう支援する。 ・「楽しむこと」に加えて、子どもに考えさせたい「ねらい」を意識して行う。			



【DVD】



日常生活から学ぶ



障がいをもつ人の能力への着目



「ハイ!」は1かいだけ。2かいはしっばいです。

一緒に遊べる遊びの提案
(クルクル風船ポンポン)

【絵本】

在学生による作成













Step3
実施&改良

保育園で実際に実施し、子ども、保育者、保護者の反応などを評価







「(怪訝そうな表情)
足、ほそっ!」

多様性理解の芽生えと
障がいイメージの修正

「腕の力が凄い!」

「車椅子がないと、
いろんな所へ行け
ないね」

身体感覚を経て得た
他者理解の深化

「えっ! 階段
上げるの…?」
/ 「できたけど
…、大変だ…」



「動きにくい!」
「疲れる!」
「いつもと違う」

◆社会発信

東洋大学オリンピック・パラリンピック特別研究プロジェクト

入場無料

幼児期の「障害理解教育」を考える

The Education of Understanding Disabilities

- 教育実践ツールの開発を通して -

2020年1月11日(土)
13:00 開場 / 13:30 ~ 15:15

会場：東洋大学朝霞キャンパス 314 教室
(住所詳細は裏面参照)

第1部 13:35 ~

対談：当事者の立場から考える障がい理解教育の重要性
大月 美香子さん (東京小児療育病院) × 南野 奈津子 (東洋大学ライフデザイン学部)

第2部 14:15 ~

本プロジェクトの概要および
障がい理解教育の教育実践ツールの紹介
南野 奈津子・嶋崎 博嗣・田尻 由起 (東洋大学ライフデザイン学部)
都築 淳先生 (ふたばランド保育園 園長)



障がい理解教育のいま

The Education of Understanding Disabilities

幼児期における多様性理解教育の普及に向けて

2019年
2月2日(土) 13:00~16:00

入場無料

13:00~13:10 開会挨拶

第1部 13:00~14:30
基調講演
「幼児期における障がい理解指導」
講師：水野 美由 (東洋大学医学部看護学専攻)

第2部 14:30~16:00
パネルディスカッション
「障がい理解教育の最前線から」
パネリスト
・「幼児期の障がい理解教育の現状～アンケート調査より～」
南野 奈津子 (東洋大学ライフデザイン学部教授)
・「障害児通学における障がい理解教育」
杉野 学 (東京歯科大学教授)
・「実習場での取り組み」
川原 美由 (東京都立西が子保育園)

助産者：水野 美由

会場：東洋大学朝霞キャンパス 地五原駅前市街48-1 講義棟：314 教室

主催：東洋大学ライフデザイン学部 生活支援学科学子も支援学専攻 共催：朝霞市

後援：一般社団法人ゆがが親子支援協会 朝霞市 朝霞市 朝霞市



◆メディア関係

子育て世代がつながる 東京すくすく 東京新聞 TOKYO-NIPPON

TOP > 京東画 - 幼保課画 > 「いろんな人がいる」を知るために… 幼児期から大切な障害理解教育 保育・教育施設の65%が実施せず

公開日: 2019/02/26(水)

五十巻発刊 (2019年2月26日付 東京新聞朝刊)

保育所や幼稚園などに障害児の入園が増える一方、保育・幼児教育施設の65.2%で障害を理解させる教育をしていない実態が、東洋大学ライフデザイン学部 南野津子教授(40)らの調査で分かった。「必要がない」「やり方が分からない」など偏見の要因が目立ち、現場の負担も高まっている。専門家は「幼児期から障害への理解を深めることで、いろんな人が世の中にいることを知り、子どもたちの活動が多様化する機会となる」と必要性を話す。

特別なニーズを持つ子への理解が深まった	64.4 (%)
対象者に温かいサポートができるようになった	56.3
クラスの雰囲気プラスに変わった	47.5
保育者自身が障害への理解が深まった	42.5
特別なニーズを持つ子の気持ちの安定が図られた	33.8
保護者の学級への理解が深まった	25

※東洋大学の調査

やらない理由「方法がわからない」「必要ない」

東京すくすく2019年2月26日 (tokyo-np.co.jp)

いまこそ企業は「インクルーシブ教育」でCSV創出を!

8/11(水) 9:09 配信 2 2 2

alterna

■多様性を「理解」するための教育

多様性を理解して、受け入れてもらうための啓発活動は、就職以前の教育機関で早期に行うとより効果が上がると考えています。

東洋大学では「ダイバーシティ実現に向けた幼児期からの教育プログラムの開発」と題し、障がい者スポーツを活用した障がい理解教育として保育園や幼稚園向けのプロジェクトを進めています。このプロジェクトでは、障がい者スポーツを活用し、幼児に障がい理解教育を行う実践プログラムを開発しています。

本プロジェクト担当の南野奈津子・東洋大学ライフデザイン学部 生活支援学科教授は、「幼児期から多様性を受け入れる姿勢や考え方を身につけておくためにも、やはり早い段階から『障がい理解』の教育や体験が必要だと考えます」と本記事のインタビューで回答しています。

南野教授は関東の1都6県にある計2000カ所の保育・幼稚園を対象に実態調査を行いました。その中で、障がい理解教育を実施しなかった主な理由として以下があがりました。

- ・専門的な内容でやり方がわからない
- ・活動をするための人数がない
- ・指導案や教材がないから

このように、リソース（人材、コンテンツ）のネックがあることが明らかになっています。

伊藤芳浩氏「Alterna」2021年8月11日



第三文明社『灯台』No723.
「特集 個性っていいね！」(2021年12月)

◆ 幼児教育実践者などからの反応

(シンポジウムの参加者)

『教育関係に従事している者ではありませんが、身内にてんかんを繰り返し、障がいをもつ子(4歳児)がいます。このような素晴らしい研究がされていることを嬉しく思いました。

障がいがある人もない人も共に笑顔に暮らせる社会を希みます。本日はありがとうございました。

(ツールを送付した保育園園長から)

東洋大学研究プロジェクトチームの皆様

先日は教育ツール一式をお贈りいただきましてありがとうございました。

ご完成おめでとうございます。

私達の園は、特別な保育を取り入れている園ではありませんが、障がいをおもちのお子様を預かり一緒に生活をしたこと等があります。様々な個性をいかに発揮しあえる環境づくりをしていこうか、日々勉強の毎日です。

今回は、きっかけづくりをいただきまして、子ども達と話をしたり、考える場を設けることができました。そして、小さなことですが、気づきを保育で見つけることが出来ました。

障がいをもった方たちに対して以前は“かわいそう”“かわいそうだから手伝ってあげなきゃ…”の声が多かったのですが、(思いは大切にしようと思います)話をしていく中で、かわいそうだけではなく“僕たちと同じように〇〇していたのみたよ”“2つの車にハンドルみたいなのがあってビューって行っちゃった”(車イスのことと思います)“お買い物してたよ”“お店の人が知らなかったからパパが手伝ったらにこにこしてた”の会話になり、よく見ているんだなあ…と感激することもありました。

絵本の最後になりましたが、それぞれにあった道具を使い、工夫しながら生活しているということの大事さを一人ひとりがみている(感じている)ということがわかったことは最高だなあ、と思いました。

◆課題

- 「障がい理解教育」が含む範囲、をどう考えるか
- 「教育」として行うべきことなのか
- 「配慮は重要だが、障がいによる行動で傷つく子どもについてどう考えるか」との意見
- ・ 研究の蓄積の少なさ

◆今後の展望

- 教材をより多くの保育所・幼稚園等と共有し、障がい理解教育の浸透に取り組む
- 実施がもたらす効果・課題の評価

「ダイバーシティ実現に向けた教育」のさらなる探求へ